Osaka University Knowledge Archive

Title	学習者はセルフスタディタイムをどう捉えているか：アンケート及びインタビュー調査の結果から
Author(s)	森，美紀；榎原，実香；鹿目，葉子 他
Citation	間谷論集. 2020, 14, p. 141-155
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89868
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〈研究ノート〉

学習者はセルフスタディタイムをどう捉えているか
――アンケート及びインタビュー調査の結果から――

森美紀、榎原実香、鹿目葉子、大橋真由美

〈キーワード〉 セルフスタディタイム　即時的解決　相互作用　時間管理

1．はじめに

多くの教育機関においてクラス授業という一斉での学習形態が採られている。しかし、一斉授業では、個々の学習者の理解度や定着度に対応することが困難である。そのため、理解や定着の早い学習者は時間を持て余し、遅い学習者は授業についていけなくなるというジレンマが生じる。

そこで、筆者らはこのジレンマを少しでも解消し、個々の学習者が各自のニーズに合った学習を行えるよう、2018年度春学期に授業内でセルフスタディタイム（self-study time, 以下SST）の実施を試みた。SSTとは授業の最後に、学習者が自分に必要だと思うことを自分で考え、学習する時間のことである（森他2019）。学期終了前に実施したアンケート調査の結果、対象者の国籍は13か国と多岐に渡り、多様なバックグラウンドを持っているにも関わらず対象者全員がその有効性を認めていた。これを踏まえ、2018年度秋学期以降も筆者らの担当クラスにおいてSSTを継続して実施している。

本研究では2019年度春学期に実施したアンケート調査の自由記述回答とインタビューの結果を、学習者がSSTをどのように捉えているかという観点から分析し考察する。

2．先行研究

2－1．セルフスタディタイムについて

SSTに関する実践研究は、管見の限り見当たらない。SSTは授業内に行われる

自律学習の時間であり、教師は決定者ではなく支援者である。

自律学習に関する実践研究は多く見られ、学習者に学習計画や目標を立てさせる、ポートフォリオを活用して自己評価を促すなど様々な取り組みがなされている。しかし、それらの目的は学習者の自律性やメタ認知を育成することであり、そのために何をすることが必要かは教師が考え決定していることが多い。つまり、SSTとは目的も決定者も異なる。

自律学習の取り組みの一つである「チュートリアル」（藤田 2009:20）では学習者が学習内容を決め、教師がそれを支援する形で自律的な日本語学習を目指しており、学習者が決定する点、教師は支援者であるという点ではSSTと類似している。しかし、チュートリアルの目標が「学習者が自分に必要な学習を自分で行えるようになることである」一方、SSTは、「授業中に個々の学習者が各自のニーズに合った学習を行えるよう、学習の機会を与えることにより、一斉授業におけるジレンマを解消すること」を目的とし、「学習者の潜在的な自律性を活かして学習できる機会を与え、同時に学びの責任が自己にあることを意識させる」ことを目標としている。この点が両者の違いである。

また、SSTにおいては、個人で学習するかクラスメートと学習するか、教師も巻き込むかといった学習形態の選択も学習者の意思決定に任せている。池田・舘岡（2007:53-54）はピア・ラーニングのメリットとして、リソースの増大、相互作用による理解深化をあげている。リソースの増大に関しては、個々の学習者はそれぞれ異なった文化、背景や経験、知識を持っているため、学習者が共通の言語で教え合うことによって、各自が持っているリソースを互いに提供することができ、その分リソースを増大することができると述べている。そして、相互作用による理解深化に関して、「仲間との対話は、互いの理解を深めたり、考え方を変容させたり、また、新しいものを生み出したりする可能性がある」と記している。SSTにおいても、ピア・ラーニングほど他者との関りは深くないものの、時折、近くに座る学習者同士、あるいは共通母語を持つ学習者同士などでわからない点を教え合ったり、一緒に練習したりする場面があり、その中で自己理解を修正したり、確認を深めたりする様子が観察された。このことから、SSTにおいてもリソースの増大及び相互作用による理解深化が期待できる。

2-2．森・秋田・大橋・鹿目（2019）

筆者らは2018年度春学期にSSTを試みた。実践後のアンケート調査の結果、学習者全員がSSTは有効であったと回答した。その理由についての回答をみると、①その日の学習項目をすぐに消化できる、②その日の学習項目を教師やクラスメートがいる場で消化できる、③自分で選択した学習項目を自分のペースで学習できる、に大別される。また、SSTにおいて行ったことに関する質問に対し、9割以上が漢字や語彙の復習や予習と回答した。そして、1回あたりのSSTの長さに関しては20分程度が適当であるという回答が最も多く、頻度は1週間に2回以上が望ましいという回答が9割以上であった。教師側にとってもSSTに学習者が勉強している様子や学習者からの質問によって自分の授業を振り返ることができ、一斉授業では気づけなかったような一人一人の学習者の学習状況を把握することが可能になるなど、多くの利点がもたらされた。

つまり、SSTは学習者と教師の双方にとって有益であるといえる。森他（2019）のSSTは初の試みであり、学習者の学習観や教師像によっては、授業中にSSTを行うことに対して抵抗を感じていた学習者が存在する可能性が危惧された。そこで、学習者が授業内のSSTについて有効と感じているかどうか調べるため、学期終了前にアンケート調査を実施した。アンケートには有効または有効でないと感じた理由も学習者に自由に記述してもらった。しかし、筆者らは回答を集計したのみで意識面までは探っておらず理由の分析が課題として残った。

そこで、本研究ではアンケート調査だけではなくインタビュー調査も加え、それらの分析を通して学習者がSSTをどのように捉えているかを明らかにすることを目指した。そして、学習者がSSTをより有効に活用し、自律的に学習できるようにSSTのより良いあり方を検討する。

3．実施・調査概要

調査に先立ち、筆者らは日本語の初級レベルの5クラスでSSTを実施した。授業期間は2019年4月から7月までの16週間、授業は1週間に8コマ、1回の授業は1コマ90分×2コマの180分である。時間が確保できた場合、180分の最後の10分～20分程度をSSTに充てた。

実施にあたり、まず学習者にSSTの意義、目的を説明した。学習内容は学習者自身が決定し、日本語学習に関することであれば、何をどのように学習しても構わないことも説明した。教師は机間巡視をしながら質問に答える、学習者の様子を見守る、集中していない学習者にはその日の学習項目を確認できるような質問を与える、などをして学習者を支援した。

学期終了前にアンケート及びインタビュー調査を実施した。アンケートの対象はSSTを実施した5クラス、15か国、55名である（アンケート内容については付録参照）。インタビューは上記の学習者のうち協力が得られた7か国、11名（男：6名、女：5名）を対象とした。インタビューに先立ち、協力者に研究の目的、インタビューが強制ではなく自由意思によるものであることを説明し、同意を得た。インタビューは協力者1名もしくは2名、インタビュアー2名、通訳者1名で行い、協力者は初級レベルであることから、使用言語は英語、1回のインタビューは20分から30分とした。学習者のSSTの捉え方をより具体的かつ明確にするため、半構造化インタビューを採用した。

4．調査結果

本調査では、まず学習者の背景・日本語学習に関する調査を行ったが、学習者のバックグラウンドが本調査に影響を与えていないと判断されたため、詳細については紙面の都合上割愛させていただく。SSTの有効性に関する調査の主な集計結果は以下の通りである。[1] Q2とQ3に関しては、選択肢を「強くそう思う(strongly agree)」「そう思う(agree)」「そう思わない(disagree)」「全くそう思わない(strongly disagree)」、Q4とQ5に関しては、「はい(yes)」「いいえ(no)」としている。[2]

Q2. I was able to spend self-study time effectively.

Q3. I would like to have self-study time during class time next semester, too.

Q4. Do you think it was helpful to study during self-study time in class?

Q5. Did self-study time have an affect your motivation for learning the Japanese language?

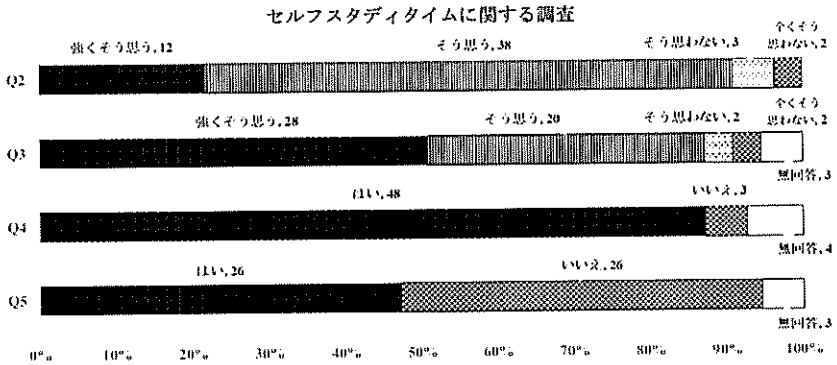

図１　セルフスタディタイムに関する Q2, Q3, Q4, Q5 の結果

SST が多くの学習者にとって効果があったことは、森他（2019）によって明らかになっている。本調査においても、「Q2. SST を効果的に使うことができた」という問いに 55 名の回答者のうち 50 名が「強くそう思う」または「そう思う」と回答し、「Q3. 次の学期も SST があることが望ましい」という問いに対しても、52 名の回答者のうち 48 名が「はい」と回答している。「Q4. SST に勉強したことによって役に立ちましたか」という問いにも、51 名の回答者の中で 48 名（約 94%）が「はい」と答えている。このことから学習者が SST を有益なものと捉えていることがわかり、森他（2019）の結果を裏付けることができた。なお、今回新しく設けた「Q5. SST はあなたの日本語学習の意欲に影響を与えましたか」という問いに対する回答は、「はい」と「いいえ」が半々に割れた。

以上、SST に対する捉え方および取り組む姿勢に関する Q2、Q3、Q4 の回答結果から、ほとんどの学習者が SST を有益だと感じたことは明らかになったが、そう感じた理由は学習者によって異なると考えらえる。次の章ではその分析を試みる。また、Q2、Q3、Q4 に対する否定的な回答の理由も探りたい。

５．考察

本調査では、学習者の SST における意識に着目し、コメントの分析を試みる。また、森他（2019）を基に、本調査ではさらに Q2 ～ Q5 のそれぞれの回答に関

する具体的なコメントを分析する。なお、アンケートのコメントは自由記述である。本調査の目的に直接関りのあるQ4、他の項目やインタビュー内容から学習者がSSTをどのように捉え、どのように取り組んだかについて考察する。

5－1．他者との関り

Q4に対し「はい」と回答した48名中20名から「先生（友人）に質問できる」といったコメントが得られた。教師への質問は授業中も当然可能であるが、インタビューの中で、授業中に皆の前で質問することが恥ずかしい、自分が質問することで授業を中断してしまうのではないかという配慮などから質問することをあきらめる学習者もいるということがわかった。しかし、SSTでは、教師は机間巡視をしながら一人一人の学習者の様子を見守る、質問を投げかけるなどして学習者が個々の学習に取り組めるようにサポートしている。そのため、学習者はSSTには物理的にも心理的にも教師との距離の近さを実感するのではないかと考えられる。実際に、Q2やQ5の問いに、「強くそう思う」「そう思う」「はい」と答えた人の理由に、「先生の助けを得ることができた」というコメントが目立った。このことから、教師に質問する機会を得られることで安心感や満足感、自信などを得ていると考えられる。また、アンケートの最後に設けたSSTに関する自由記述欄において、「教師はSSTに学習者一人一人と会話をし、学習者の疑問点を聞くべきだ」というコメントもあった。ここからも、学習者がSSTを「教師に直接アクセスできる時間」と認識していると言える。

さらに、教師との関りだけでなく、クラスメートとの関りに関するコメントも見られた。以下のインタビューで、ある学習者は自分よりできる学習者がSSTに何をやっているかを見て、自分も同じことをしてみると述べており、SSTで他者の様子を観察したり、他者と関わったりすることによって、自分の学習に影響を受けたことがうかがわれる。

Interview Q8. 何か日本語を勉強するストラテジーはありますか。[3]

I usually like...I'm not like top of the class, but I'm in the middle, good middle, so I look into, at the guys and girls who study better than me. And I ask him advices.

I think that you don't have to be arrogant; you have to always ask people why they succeed. Take the example, like (クラスメート) works more than me, so I guess I should work more as an example, I know that other people they like to read and write, just write random hiragana words, so I also try that sometimes. And like just practice. That's all.

このように、SST には学習者と教師だけでなく、学習者同士の相互作用も起こっていることがうかがえる。また、他の学習者に対するインタビューにおいても、先生に自分の解答があっているかどうか確かめてもらう、わからないことをクラスメートに聞くといった回答が得られた。ここから、学習者は SST には教師やクラスメートがいることで学習リソースが増大し、その活用が自分の学習の助けになることも十分に心得た上で、学習に取り組んでいることがわかる。

一方、1 名ではあるがインタビューの中に軽視できないコメントもあった。

Interview Q9. 授業でセルフスタディをすることについて、どう思いますか。
It is good I have self-study, but I don't feel effective. Because I think it's good for some people, but I feel ... I have the discipline myself, so I do self-study before. For me, it's not bad, it is one extra time, where I can do it, but I don't feel ... I need it. I wouldn't feel bad not having it...

このように、すでに授業外で時間を確保でき、勉強できている学習者にとって SST は「単に勉強の時間が増えただけ」であり、SST が有益であることは認めつつも、自分にとっては必ずしも必要なわけではないと捉えられる可能性が浮かび上がった。

以上、教師や他の学習者との関りによる相互作用のメリットを十分に認識し、活用している学習者がいる一方で、そのメリットを認識していないために、せっかくの機会が活かせていない学習者がいることも明らかになった。そのような学習者に対して SST が単なる自習時間ではないこと、自宅学習では得られないリソースの増大とそれに伴うメリットをいかに伝えるかが今後の課題として浮き彫

りになった。

５－２．自律的な学習

Q4で「はい」と回答した48名中15名のコメントの中には、自分のペースで勉強できるという内容の記述が見られた。以下にその一部を引用する。

Q4-1. In what way was it helpful? Please write details.
Take a breath and look at material we have studying.
Able to learn ahead when I felt like I already understood what was taught in class.
Gives time to evaluate what you learned that day, in your own pace.

「３．実施・調査概要」で述べたとおり、SSTは180分の授業の最後の10分～20分程度に設けられる。つまり、学習者はそれまでは教師の指示やクラスのペースに合わせて学習を行っており、ある意味で緊張を強いられているわけである。しかし、SSTではそのような緊張から解き放たれ、学習者は一息ついてから自分のペースでその日の学習や理解度を確認し、問題がなければ先へ進むなど各々が自分のペースで勉強を進めていることがコメントから明らかである。ここから、学習者がSSTを「学習者自身の時間管理のもと、学習を行う場」であると捉え、自律的に学習を進めていると考えられる。このことは、Q2に対し「そう思わない」と回答した３名の理由にもあらわれている。

Reason: *It is difficult to focus for me while study./ Bad time-management + laziness/ Sometimes it's really hard for self-study.*

つまり、SSTを効果的に使うことができたかどうかに関わらず、ほぼ全ての学習者がSSTを「学習者自身の時間管理のもと、学習を行う場」と認識していたと言える。ただ、上記のような学習者は勉強に集中できない、時間管理をすることが苦手だという自分自身の問題に気づいていながらも、それを克服するための方策を持っていないために、SSTを有効に使えなかったことがコメントから明ら

かである。これは今後の重要な課題である。

5－3．即時的な問題発見と解決

最後に、Q4 における自由記述欄から得られた 48 名のコメントのうち、半数である 24 名のコメントの中に、「その日」「今日」「すぐに」「復習」といった語が見られた。

Q4-1. In what way was it helpful? Please write details.

Give students time to absorb the knowledge that they get from class immediately.

上のコメントにも見られるように、学習者はその日に学んだことを記憶の新しいうちに振り返ることによって自分の理解を確認し、問題があればそれを即時的に解決することで、学習項目を消化する時間として SST を活用していることがわかる。森他（2019）でも述べているように、学習者は日本語以外にも複数の科目を履修しており日本語の勉強だけに集中できるわけではない。そのような状況においては、いかに時間管理をし、限られた時間を有効に使えるかが学業の成果を左右すると言ってもよい。約半数のコメントに「その日」「今日」「すぐに」「復習」といった語が見られたことは、学習者が SST を即時的な問題発見と解決の場と捉え、時間管理の意識を持って学習に取り組んだ裏付けと理解できる。

6．まとめと今後の課題

ここまでの考察とそこから導き出された課題を以下にまとめる。

まず、ほとんどの学習者が授業内の SST を教師やクラスメートという他者が存在する教室で、「学習者が主体的に時間を管理し、他者との関りの中でリソースを増大させながら、即時的に問題の発見と解決ができる場」と捉えていることがわかった。そして、実際に教師やクラスメートとの関りの中で相互作用の効果を得ていることも明らかになった。

一方、そのような認識を持ちながらも、そもそも勉強に集中することや時間管理をすることが難しいために、SST を有効に活用できていない学習者がいる事実

も浮かび上がった。この場合、SSTにおける問題発見と即時的解決というメリットを十分に認識していないか、認識していても自身で何をすべきか見出せない可能性がある。そのような学習者への対応として、教師は短時間でできる確認問題を与える、質問やキューを与えて答えさせる、チェックシートを用意し、学んだことができるかどうかチェックさせるなど、その日の学習の振り返りにつながるサポートをすることが必要である。それにより、10分～20分という短時間であっても、その日の学習を振り返り、問題発見と解決ができるという気づきを学習者に与えられるだろう。

また、SSTが有益であることは認めつつも、授業外で十分に学習時間を確保できる学習者の中には、必ずしも自分には必要ではないと捉えている者がいたという事実も判明した。この場合はSSTには教師や友人というリソースを活用することによって得られる相互作用のメリットを認識していないことが考えられる。このような学習者に対して、教師は学習者の様子を見ながら、学習者同士でクイズを出し合わせる、学習者に声をかけて自然な状況で教師と日本語で話す練習をするなどの学習方法を提示して、メリットを学習者に体験してもらう機会を作ることも大切である。他者との関りによって得られる相互作用は自然に起こるとは限らないため、SSTを有効に活用している学習者に対しても同様の対応が必要かもしれない。

以上のことから、今後の課題として以下の二つが挙げられる。

一つは、学習者にSSTのメリットを体験し、認識してもらうための教師側の工夫である。これは、SSTを有効活用できている学習者に対するより良い活用法を模索するためにも、必要なことである。SSTが学習者の主体的な行為であることを鑑みれば、教師が学習者にSSTに学習することや学習形態を強要することは適切ではない。しかし、SSTをより有益なものにするためには、そのメリットを学習者に体験し、認識してもらうための教師側の工夫も不可欠である。教師はクラス全体と一人一人の学習者に目を配り、学習者の様子に合わせて適切な対応をすることが肝心である。ときには、教師から学習方法や内容を積極的に提示することも必要だろう。

もう一つは、教師がSSTを安定的、持続的に実施することである。これまで

は時間が取れず、SST を行えないことも少なくなかった。SST が安定的に実施されれば、学習者がその効果を体験する機会が増える。そして、確実に SST があるとわかれば、学習者は SST に何をするか考えながら授業に臨むこともできるだろう。そのために、教師自身の授業中の時間管理や授業計画の見直しが求められる。

注

1 アンケート調査によって得られた結果には、無回答の項目が見られたため、量的処理を行っていない。また、そのような学習者の姿勢も調査を実施するうえで無視できないものであるとし、得られた回答全てを分析の対象とする。本調査においては、質的な分析に主眼をおいて考察を進める。

2 アンケートは英語で行った。本調査では、Q2 ～ Q5 の問い及び回答を必要に応じてできるだけ原文に近い形で日本語に訳した。

3 教師、学習者ともにほとんどが英語母語話者ではないため、アンケートおよびインタビューの回答の中には英語の間違いが見られることもあるが、できるだけ、原文、話されたままを提示するようにしている。また、紙面の都合上、特に必要と思われるコメントのみ引用している。

参考文献

池田玲子・舘岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門－創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房

藤田裕子（2009）「自律的な日本語学習を目指した授業に対する教師のイメージ－経験年数による比較－」『桜美林言語教育論叢』pp.17-34

森美紀・秋田美帆・大橋真由美・鹿目葉子（2019）「一斉授業におけるセルフスタディの試み」タイ国日本語教育研究会第31回年次セミナー（於：国際交流基金バンコク日本文化センター）ハンドアウト

モリミキ（東京国際大学　Japanese Language Institute　日本語専任講師）
エバラミカ（東京国際大学　Japanese Language Institute　日本語専任講師）
カノメヨウコ（東京国際大学　Japanese Language Institute　日本語専任講師）
オオハシマユミ（東京国際大学　Japanese Language Institute　日本語専任講師）

付録　セルフスタディタイムに関するアンケート項目

<Questionnaire on your self-study time>

Q1. What did you do mainly on your self-study time in each Japanese class?
Choose three answers and place them in the order of frequency.

a. Meaning of sentence pattern, understanding and memorizing of verbal and adjective forms that you studied at that day
b. Memorizing of new vocabularies or vocabularies that you haven't picked up yet
c. Making sentences with using sentence pattern or vocabularies that you studied that day
d. Conversation or Q&A practices
e. Practice exercises in a text book or handouts
f. Kanji
g. Preparation for next lesson
h. Other　Please write a detailed description

1　　2　　3

Q2. I was able to spend self-study time effectively
a. strongly agree　b. agree　c. disagree　d. strongly disagree
(Reason:　　)

Q3. I would like to have self-study time during class time next semester, too.
a. strongly agree　b. agree　c. disagree　d. strongly disagree

If your answer is a, b or c
Q3-1. How many times per week do you think it's adequate for you to have self-study time?
a. four times　b. twice　c. three times　d. once

Q3-2. How many minutes do you think it's adequate for each self-study time?

Q4. Do you think it was helpful to study during self-study time in class?
a. Yes　b. No

If your answer is a.
Q4-1. In what way was it helpful? Please write details.

Q5. Did self-study time have an affect your motivation for learning the Japanese language?

a. Yes　b. No

If your answer is a.
Q5-1. How did it affect your motivation? Please write details.

Please feel free to write additional opinions about self-study time.

Thank you very much for your cooperation.

Students' viewpoints on "self-study time" based on interviews and survey results

MORI Miki, EBARA Mika, KANOME Yoko, OHASHI Mayumi

Many academic institutions provide traditional class lessons as a means of instruction. However, traditional classroom instructions can be quite challenging as to the degree of comprehension and internalization among learners individually. Consequently, there is a dilemma where advanced learners have too much down time while others are left behind.

To address this dilemma and provide an environment where students could study materials according to their individual needs, the researchers implemented "self-study time" during class in spring 2018. "Self-study time" is where students decide what to study and work on it. We have been continuously implementing "self-study time" since fall 2018 based on the survey results that the majority of students responded positively to "self-study time" (Mori, et al, 2019).

This study presents the discourse of the survey results and interview responses conducted in spring 2019, in particular, the students' perceptions of "self-study time". The results indicated that students thought "self-study time" provided an opportunity to manage time and utilize resources in a time frame suited to their own needs.

However, the results also revealed that some students could not utilize "self-study time" efficiently. One reason was due to inefficient time management skills. The other reason was that some students had ample time outside of the class that "self-study time" was unnecessary. It is not necessarily constructive to force students to use "self-study time" because the goal is to promote independence and responsibility among students, but as previously discussed, "self-study time" has merits such as immediate response and support from peers and instructors, which studying at home cannot provide. In either case,

it is possible that the concept of "self-study time" is rather unclear. For the future study, it is imperative to find out how to articulate the concept of "self-study time" for better use. It is also necessary to ascertain other ways to utilize "self-study time".